

通信

～潟の歴史を未来につなぐ～

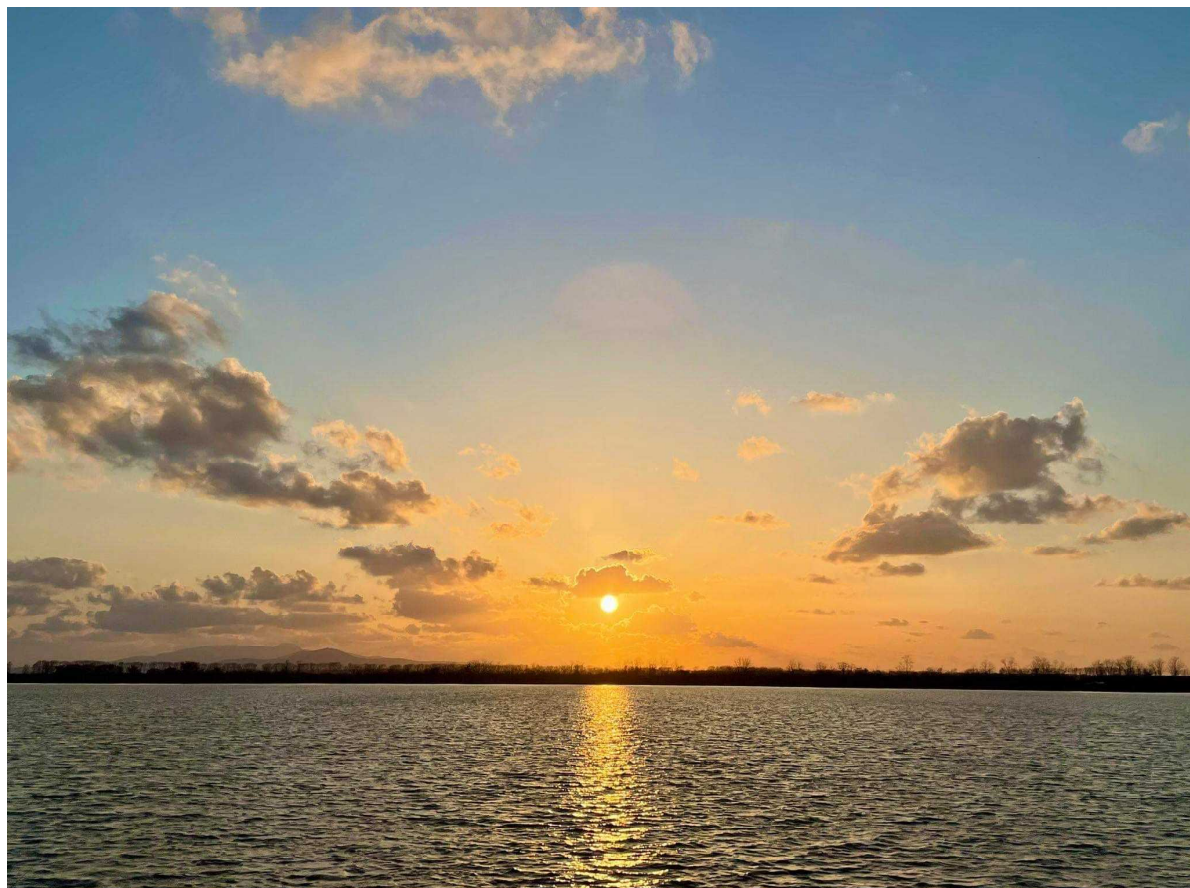


2022/04/01

潟さべり

第6号

八郎潟・八郎湖学研究会 発行



写真提供：佐藤佳奈氏（毛筆デザイナー：八郎潟町出身）

令和4年度総会・鑑賞会を開催します

コロナ禍のため、ほぼ2年間にわたって活動の休止を余儀なくされておりましたが、令和4年度の総会及び鑑賞会（大型紙芝居「八郎太郎」ほか）を次の通り開催いたします。感染予防に十分配慮して開催いたしますので、多くの皆様のご参加をお待ちしております。

◇期 日 令和4年4月23日（土）

◇会 場 八郎潟町えきまえ交流館はちパル 交流ホール

◇日 程 受付 13：00～13：30

鑑賞会Ⅰ 13：40～14：40→三種町図書ボランティア「はみんぐ」による紙芝居

鑑賞会Ⅱ 14：50～15：40→八郎潟干拓前後を記録した映像「県政だより」

総 会 16：00～16：45 会員の皆様は年会費の納入をお願いいたします

※詳細はチラシをご覧ください

新刊発行のお知らせ

2019年5月に本会の叢書第一弾として出版された杉山秀樹著「八郎潟・八郎湖の魚～干拓から60年、何が起きたのか～」に続いて、いよいよ第二弾の叢書が発刊されました。

タイトルは「八郎潟はなぜ干拓されたのか」、著者は本会会長の秋田県立大学教授、谷口吉光氏です。さががけブックレットより上梓された本書は、2018年10月に五城目町で開催した現地セミナーで講演した時の全文記録を中心に、「解説」や「八郎潟を考えるためのブックガイド」、「八郎潟干拓年表」を加えて構成されています。

中心部分となる「本当は知らない八郎潟干拓の話」では、「序」として谷口氏が本会（八郎潟・八郎湖学研究会）を立ち上げた時の思いや自身と八郎潟との関わりなどが語られ、講演に至った背景などが説明されています。

本題の第1部では石器時代からのこの地域の様子について掘りおこし、さらに江戸時代・明治期の様子、そして過去にたびたび考案された干拓計画について詳しく説明されています。

また第2部では「ヤンセン案」を中心に当時の干拓事業をめぐる賛成派・反対派の対立などが語られ、さらに続く第3部では干拓事業決定後の漁業補償や農地配分計画の変遷などについて説明されています。

八郎潟干拓は工事着工から今年で65年を迎えますが、本書は干拓の歴史を知る興味深い読み物としてはもちろんのこと、埋もれかけた歴史に光を当てたことで、干拓事業全体を俯瞰した資料がほぼ皆無だったこの分野の研究資料としても、これから続くであろう若い研究者たちにとって貴重な文献となると思われます。

谷口氏は本書の「あとがき」で、「八郎潟干拓は終わっていない。（中略）八郎潟干拓を過去の話に終わらせるのではなく、現在から未来の私たちの生き方につなぐ議論が始まることを願っている。」と書いています。本書の出版を機に、この地域で生活する人々が改めて干拓について立ち止まって過去を知ること、環境問題も含めた課題解決など、地域の未来を考えるための最適な一冊となることが期待されます。



本書は3月末に上梓されたばかりで、書店の店頭に並ぶのは4月中旬ごろの予定です。お求めは書店かインターネットでお願いいたします。

なお4月23日土曜日開催の、令和4年度総会

の会場でも販売を予定しています。価格は880円(税込)のところ会員の皆様には特別価格800円(税込)でお分けいたします。当日はサイン会も併せて行いますので、この機会にぜひお求めください。

「令和3年度総会・講演会」を開催しました

令和3年12月18日土曜日、コロナ禍で延期を余儀なくされていた令和3年度の総会・講演会を八郎潟町えきまえ交流館はちパルで開催しました。年末の慌ただしい時期ではありましたが、多数の会員にご参加いただき、無事開催できました。

総会に先立つイベントとして、本会理事でもある秋田県立大学教授の高橋秀晴先生から、『『潟の文学散歩』の舞台裏～八百年の時空を巡る～』と題してご講演をいただきました。

『潟の文学散歩』は秋田魁新報に2020年4月から2021年8月まで全70回にわたり、毎週土曜日に連載された人気のコラムでした。



先生自身は当初、一年間くらいの連載と考えてスタートしたそうですが、鎌倉時代の歴史書「吾妻鏡」の記述を紹介した第1回から始まり、28人の作家・文学者の作品を紹介した長期連載となりました。それだけ「八郎潟・八郎湖」が登場したり舞台となったりした作品が豊富にあるのだという事実にも改めて驚かされました。

今回の講演会では70回の連載の中から、「特に重要な作家・作品をピックアップして、書き切れなかったエピソードや執筆のプロセス等、いわば氷山の海面下の部分についてお話しします」との予告どおり、江戸中期の与謝蕪村や明治期の幸田露伴、地元の畠山松治郎や石田玲水など7人を取り上げて詳しくお話しされました。



講演では、各回ごとに作品に関連した写真と簡単な地図を必ず付けて（この作業は秋田魁新報の担当記者さんが一手に引き受けてくれて助かったそうです）、読者に身近に感じてもらえるよう配慮したことや、執筆中の苦労話など、まさに自由闊達にお話が展開し、予定した時間が短く感じるほどでした。

中でも印象に残ったのは、八郎潟が詩歌や紀行文の題材としてではなく、初めて小説の舞台として登場した「貧乏人の涙」という畠山松治郎（八郎潟町一日市生まれ）の作品です。この作品は日本プロレタリア文学の嚆矢とされる雑誌『種蒔く人』の第1号と第2号に掲載されたそうですが、H湖（八郎潟）やB川（馬場目川）が登場しており、まさしくこの地で生まれ育った人物がこの地を舞台に、当時の貧しい生活の様子を描いた作品として大変興味をひかれました。

この小説が世に出たのは1921年（大正10年）ですが、それからちょうど百年目にあたる2021年の記念すべき年に、ちょうどこの講演をしているということで、プロレタリア文学が生まれた背景や今日的な意義についても話題が及びました。

時間の制約もあり、十分に語っていただけなかった部分もありましたが、連載最終回の「八郎潟に何を学ぶか」で自身の意見として語られていたのは、八郎湖、大潟村、そして周辺地域の将来を構想することの必要性でした。

その中には、具体的な提案として「旧八郎潟一帯に文学碑を建てたなら、干拓前の景観を現地に立って確認するよすがとなる。仮に本連載で示した場面に即せば69基になり、世界に類を見ない規模の碑群となろう」や「八郎潟・八郎湖と大潟村を描いた作品を全て収録した『八郎潟文学全集』の編纂もいい。（中略）文学空間としての八郎潟が丸ごと捉えられれば、思いがけない化学反応が起きるかもしれない」との記述もありました。

1年4ヶ月に及ぶ長い連載を終えてなお、まだまだ語り尽くせないことがたくさんあるように感じたのは、私だけではなく会場にいた多くの皆さんも同様であったと思います。この連載は近い将来、単行本や叢書として出版の予定もあるようですので、本を手にとる日を楽しみ待ちたいと思います。

なお、参加者アンケートには、「『八郎潟』について知らなかったこともあり、学ぶことが多い講演会でした。今後も八郎潟の過去・今・未来について知りたいし、考えていきたいと思います」や「新聞だけでは知り得ないこともあり、大変有意義でした」などの感想が寄せられていました。



引き続き開催された「令和3年度総会」では、コロナ禍により春に開催すべき総会が年末になってしまったことや、活動計画もほぼ全面的に休止状態であったことが報告されました。また、令和2年度決算報告では、関連事業とみなして支出した部分が適切ではないのではないかという意見が出され、次年度以降、同様の支出

はしないことを確認の上、決算が承認されました。

令和3年度の予算については、年度の残り日数が4ヶ月ほどしかないことから、令和3年度の会費徴収はしないということで予算案が承認されました。事業計画についてもコロナの感染状況を見ながら進めていくことで承認されました。

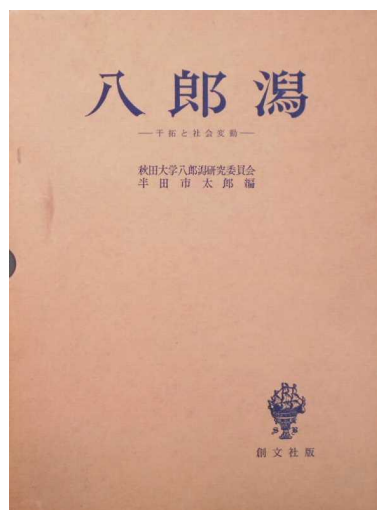
また、令和3年度は役員改選の時期にあたっていますが、今総会で役員改選は行わず、令和4年度総会で改めて役員改選を行うことが了承されました。

◇ 八郎潟アーカイブから ◇

秋田県立大学秋田キャンパスの図書館内に、本会で取り組んでいる「八郎潟・八郎湖アーカイブ」のコーナーがあります。学生だけでなく一般の方も閲覧できますので、ぜひご活用ください。今回はその蔵書の中から二冊ご紹介します。

八郎潟 ～干拓と社会変動～

【内容紹介】



八郎潟干拓を周辺地域の視点から学ぶための必読書です。八郎潟に関係する研究をしていた秋田大学の人文・社会科学系教員7名が1965～66年に文部省

(当時)の科学研究費の助成を受けて行った共同研究の成果です。古代から現代までの八郎潟周辺農漁村の歴史を通読できるので、その意味でも貴重な資料です。文章は平易で読みやく、具体的な事実を踏まえた図表、写真、地図が数多く掲載されているので、現在の地名と照らし合わせながら読めば、地域の歴史を知るための格好の手引き書にもなると思います。

八郎潟風土記 石田玲水 著

【内容紹介】



八郎潟を詠った「わがみずうみ」で有名な八郎潟町出身の石田玲水の著書です。斎藤茂吉と八郎潟で遊んだ時のことや馬場目川、盆踊りなど、土地の風物が30ほど取り上げられ、

地元の人々にとっては、かつての様子を知る、またとない随筆集となっています。

会員を募集しています

会員には通信を定期的にお届けするほか、各種イベントの案内、主催イベント参加費の軽減などの特典があります。

○正会員……………3,000円

○団体会員………5,000円

○賛助会員 ……10,000円

(会費はいずれも年会費です)

◎申込について

郵便局と秋田銀行に振込口座を用意しています。口座番号が印刷された郵便局の振込用紙もありますので、事務局までメール等でお問い合わせください。

～八郎潟・八郎湖に関心のある皆さん
ぜひ仲間に加わってください～

八郎潟・八郎湖学研究会

事務局：秋田県立大学 環境社会学研究室内
〒010-0195 秋田市下新城中野字街道端西241-438

TEL・FAX：018-874-8686(NPO法人はちろうプロジェクト内)

E-MAIL：88gaku@gmail.com

URL：<http://hachiro865.net/hachirores.html>